

田辺校地体育施設完成に際して

仲 村 要

昨年十一月、遅れていた第四工区が竣工して田辺校地の体育施設が総べて完成した。

旧来の施設とは比較にならない大規模なものである。

都心にある大学の宿命とはいいいながら、グラウンドも無い今出川校地で、中学校や京都御苑の御世話になったり、近隣の民家に気を使い、不足分を商業施設の借用で何とか工夫しながら進めてきた正課体育の授業。新町、岩倉、香里と遠く分散を余儀なくされ困っていた課外体育活動、五回に互る移動で落ち着かなかった研究室や事務室の事情等、現場で苦勞してきた私達体育関係者にとって、今回念願の田辺校地体育施設の完成を見たことは真に感慨深いものがある。

この機会に学内外の関係者の皆様に心から

感謝する次第である。

手前味噌を含めて施設の概要を紹介すると、田辺の体育ゾーンは校地の西部にあり、東西八五〇メートル、南北七五〇メートル、施設総面積一六一、九八〇平方メートル（約五万坪）の広さを持ち、高低差約四〇メートルの中に三十三個の施設が段状に配置され、四一種目の競技が可能である。この他に体育系ボックス棟、合宿所、事務・研究室棟を加えて形成された体育施設は、少なくとも我が国の大学では、体育大学を入れてもなお屈指のものである。（詳細は別戴の表及び略地図を参考にされたい。）

施設群の中心に磐上館（研究室、事務室）及びデイヴィス記念館（講堂兼体育館）があり、メインアリーナでは、バスケットボー

ル、バレーボール、ハンドボール、バドミントン、体操競技がほぼ同時に使用出来、半地下の階には、剣道場、柔道場、卓球場、フェンシング場の外、トレーニングルームや体力測定室が設置されている。

このデイヴィス記念館を囲む形で軟式野球場、硬式野球場、ゴルフ練習場、九コースのとれる五〇米プール、十二面のテニスコート、バレーコート、ソフトボール場等の屋外体育施設が並んでいる。

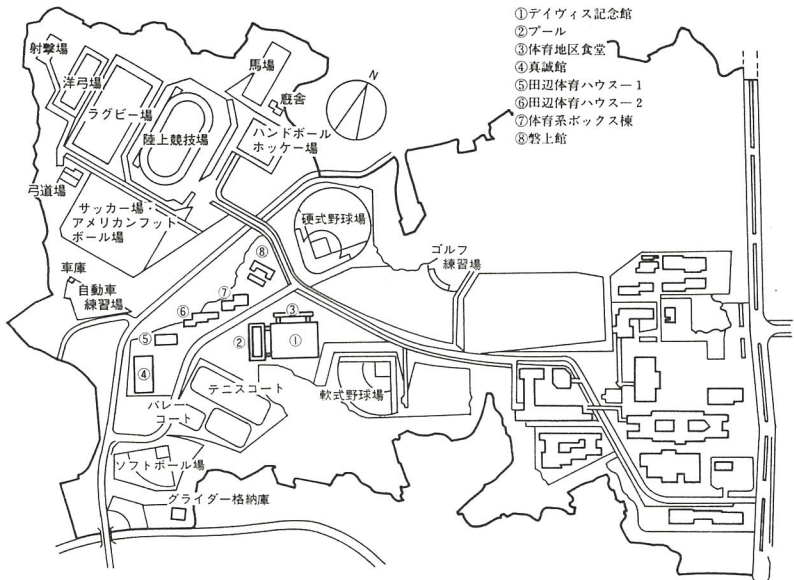
更に第二体育館として、ボクシング、空手道、相撲、レスリング、合気道、小林寺拳法、居合道、日本拳法等格技系の八種目が入っている真誠館、グライダー格納庫も建てられている。

そしてそれ等に加えていわゆる第四工区の施設が竣工したのである。最西北に位置する射撃場から順に洋弓場、ラクビー場、弓道場、陸上競技場、サッカー、アメリカンフットボール場、自動車練習場、陸上ホッケー場と続き、北端の馬場を入れて十種目がこの地域に集まっている。

これで当初の計画通り、山、水、氷を除く総べての体育施設が田辺校地に勢揃いした訳

田 辺 校 地 体 育 施 設

デイヴィス記念館 主アリーナ (2,860 m²) 女子体育場 (500 m²) 柔道場 (380 m²、160畳) 剣道場 (380 m²) トレーニング室 (560 m²) 体力測定室 (250 m²) 卓球場 (440 m²) —13種目の設備— バスケットボール ハンドボール バレーボール バドミントン 体操競技 女子体育 フェンシング 柔道・剣道 トレーニング	卓球	プール (1,600 m ² ・9コース)
	体力測定・養護種目	硬式野球場 (21,000 m ²)
	真 誠 館	軟式野球場 (11,600 m ²)
	ボクシング場 (240 m ²)	ゴルフ場 (5,000 m ²)
	空手道場 (315 m ²)	第 4 工 区
	相撲場 (215 m ²)	自動車練習場 (3,600 m ²)
	レスリング場 (315 m ²)	サッカー場 (10,900 m ²)
	合気道場 (315 m ²)	アメリカンフットボール場 (8,500 m ²)
	居合道場 (315 m ²)	弓道場 (2,500 m ²)
	少林寺拳法場 (315 m ²)	射撃場 (750 m ²)
	日本拳法道 (315 m ²)	洋弓場 (5,600 m ²)
	一降雨時の正課体育場—	ラグビー場 (15,300 m ²)
	屋 外 施 設	陸上競技場 (25,000 m ²)
	ソフトボール場 (8,800 m ²)	陸上ホッケー・
	バレーボールコート (2,000 m ²)	ハンドボール場 (7,000 m ²)
	テニスコート (14,400 m ²)	馬場 (5,000 m ²)
		グライダー格納庫 (500 m ²)



体 育 系 同 好 会

団 体 名	団 体 名
バレーボール同好会	サイクリング同好会
フェンシング同好会	山岳同好会
ゴルフ同好会	ルナティック・スキークラブ
工学部岳陵会	卓球同好会
ハイキング同好会	探検部
剣道練習会	淡水会
硬式テニス同好会	山彦会
軟式テニス同好会	ヨット・クルージング・クラブ
軟式野球同好会	民族舞踏研究会
ラグビー同好会	民カウト同好会
サッカー同好会	ス釣研究会
三ツ葉キッカーズ	

「自前の立派な施設で理想的な体育を」という私達の永年の夢が漸くかなえられた喜びは大きい。と同時にその責任の重さも痛感している。

そして、このことは、教科としての正課体育と課外体育活動とのバランスのとれた展開に負うところが大きく、そのためにもさききの体育施設の充実に望まれたのである。

今回の体育施設の完成で、正課にあっては従来施設面での制約のためにまならなかった開講種目にも今後は大胆な改善が行われる

課外体育に關していえば、從來、對外競技スポーツに重点を置いた体育会の活動として狹義に理解されがちであり、長い伝統のなかで地理的条件もあつて体育会による施設の優先的使用が定着していた。しかし、最近の大学スポーツの諸相は時代の流れを反映して、スポーツの娯樂性がより強く意識されるようになり、相當變化してきている。

スポーツ概念の多義性からいって大学でスポーツを行なう学生数が増えるにつれて大学スポーツが多様化するのとは当然であり、同好

会、愛好会、一般学生を対象に夫々の要望にも応え得る受け皿としての体育施設が必要となる。その意味では今回の田辺体育施設の利用に当っては優先順位を尊重しながらも互譲の精神で全体の調和をはかることが大切になってくる。「スポーツ・フォー・オール」である。

その中で、体育会に集う学生諸君が、日本一、世界一のチャンピオンめざして自己の能力の極限に挑戦し、厳しい勝利主義、精鋭主義の試練に耐えて日々猛練習に励む求道的な姿勢でスポーツに取り組めば、同好会の諸君は、学生々活のなかの数ある余暇活動の一つとして、スポーツを楽しみ晴らし、あるいは健康のための身体活動と考えて気楽に実践する、それより更に自由なスポーツ活動を求める愛好会や一般学生の諸君、夫々が自身自身のスポーツ観をもちながら、他のそれをも認め合い、協調して多くの施設をフルに活用する姿が私達の望むところである。そして日頃なじみのあるスポーツ好きの各層に支援された体育会の各部、各選手が文字通り全学

生の代表として同志社の名を天下にとどろかす日がくることを念じている。

「言うは易く行なうは難し」ではあるが、体育施設の充実したこの際、専門化、高度化志向のスポーツのみでなく、大衆化の方向にも目を向けて、大学体育の正しい発展に努力すべきである。

ともあれ、四十三部二千人の体育会。二十ニサークル千三〇〇人の同好会。それに加えて一〇〇グループ、四千人を越えるといわれている愛好会が新設の田辺体育施設を間断なく利用し、良い汗を流す、活気溢れる田辺校地を想像することは、たしかに楽しい気分である。それも単なる夢物語語りでなく、方法次第では、十分実現可能な状況にある事を思うと、使用時間、区分、責任体制等、具体的手法の早急なまとめの必要性を実感している。

また、これ等に関連して、いささか視点は異なるが、教職員の生活の場としては田辺校地を考えると、その福利厚生面からも体育施設の有効な使用が望まれている。

体力づくり委員会等の要望もあって、体力測定室、トレーニングルームは今出川時代か

ら組織的に使用されており、田辺校地でもゴルフ練習場やテニスコートと共に現在すでに利用されているけれども、以外の施設についても、さきの正課体育や課外体育との調整をはかりながらの活用も十分考慮され得よう。

ところで、何事も「総べて良し」とはいかないもので、今回の体育の田辺移転に関しても色々問題点が残されていることも否定できない。大規模施設の維持、管理の方法、経費、今出川との二拠点による学生移動、具体的には三、四年次生の正課体育、課外体育活動と学業の両立、練習時間不足など考えれば頭の痛いことも多い。

「分不相応に大き過ぎないか」「内容の充実は大丈夫か」「将来の展望は」等々（天の声）？ も聞える昨今である。古いコマージュ・ソングに合わせて「大きいことはいいとだ」と喜んでばかりはいられない。「宝の持ち腐れ」になっては大変。私達自身の研究面を含め自戒しながら同志社大学体育の「更なる発展と充実」のために関係者協力して頑張らなければならないと、ひそかに覚悟を決めている。

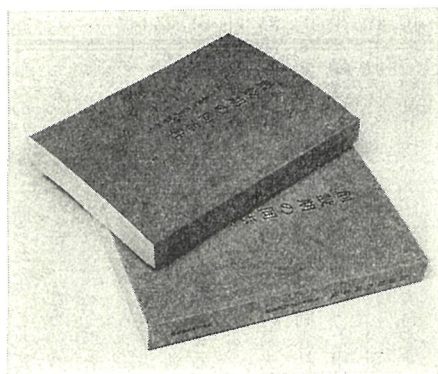
（大学経済学部教授）

初期の同志社人大いに語る

『創設期の同志社』紹介

北 垣 宗 治

このたび同志社社史資料室から発行された『創設期の同志社——卒業生たちの回想録』（四三五頁、一、五〇〇円）は、初期の同志社（明治八年—三十年）に少しでも関心のあ



る人には、読み始めると途中でやめられないほど面白い読物である。本書は元来、大正七年に警醒社から出た松浦政泰の『同志社ローマンス』のための材料として集められた六十一人からの聞き書きの集大成である。『同志社ローマンス』は現在図書館等で見る以外には簡単には見られない書物であるが、その材料であったなまの記録が今回書物のかたちで翻刻された。編集に当たられた河野仁昭室長の話によると、これの方が『同志社ローマンス』よりうんと面白いとのことである。まさしくなまの材料の面白さであろう。六十一名の先輩たち（男子四十六名、女子十五名）の証言は、きわめて立体的に、しかも活き活きと初期の同志社を眼前にうつし出してくれる。初期の同志社についてはすでに『新島先生記念集』や蘆花の『黒い眼と茶色の目』や

『池袋清風日記・明治十七年』といった材料もあることであり、歴史的記述のための材料は出揃った感じがする。

材料提供者のすべてが初期の同志社の学生だったわけではなく、湯浅治郎のような、当時「社員」と呼ばれた理事者の回想もあれば、清水泰次郎という英語教師の思い出も含まれている。清水は「ケデー氏と私が教壇に立つ様になって始めて、同志社の英語は一大改革に逢ひ、発音も漸く正されて英語らしい英語が出来る様になった。同志社の英語が整頓せられ進歩発達を遂げたのは、実にケデー氏と私との賜物であると言はねばならぬ」（一六九頁）と自己評価している。しかしこのような大見えを切る清水先生に対して堂々と直言する学生もいたのだから、面白い。吉田清太郎は清水について述べている。「此の人が教場二出るのに五分位、又は十分位遅れるので生徒が不平である。遂に私が来られる処を途中で捕へて、もっと早く来る様にと忠告した。然るに先生は丁寧ニ、どうも遅くれて済まなかった、これからは遅れぬ様ニ注意するからと言ハレ、実は諸君の英語作文をなほす為めニ、夜は一時二時頃迄かかるので、遂に

朝遅くなるのだからと断られた。これには開口してしまった」(二八五頁)。こういうぐあいに教師と学生がそれぞれの異なる立場と見方を提供するので、読者は状況を立体的に把握することができるのである。

ところで湯浅治郎の部分は、彼がまるで同志社の学生であつたかのように読める。恐らく湯浅の記憶の中に遠い過去と近い過去が同居しており、さらに聞き手が彼を同志社の卒業生と勘違いして記録した、といった事情が想像される。杉井六郎教授によれば、新島が米国から帰朝して、安中での一カ月をすごした後大阪に赴き、宣教師ゴードンの許に身を寄せていた時、湯浅が大阪に新島を訪ねてくることは新島書簡にてらして事実であるという。しかし本書では「其時私も先生に連れられて大阪に来た」(二二〇頁)とあり、これは事実とは考えにくい。河野さんが前書きの中で「非凡な人物といえども、四十年もの歳月を経た過去に関する記録には、曖昧な点もあれば多少の誤りもある」と言われるゆえんである。しかし、それにもかかわらず、本書が当時の雰囲気を活き活きと伝えてくれることは否定できない。

初期の学生たちに新島襄はどのように映つたか。新島に対する称賛の言葉はむろん沢山あるが、他方不満も卒直に述べられている。岸本能武太は教師としては市原盛宏の方をほめ、市原の授業を臨時代行した時の新島について、いろいろ質問してみたが満足な答が得られなかったという。そして「要するに新島先生は頭脳明晰と言ふ方の人ではなかったと、私は今も信じて居る」(二四頁)と断定している。新島は教師としてどんな科目を担当したのであつたか。本書によると中島力造は代数、物理、ギゾーの文明史や宗教改革の書物を習い(三一―三三頁)、小崎弘道は福音書の調和について習い(二三三頁)、吉田

清太郎は聖書と米国史(二七六頁)、村上小源太は天文学を習った(六三頁)。しかし吉田が述べているように新島先生は「級中一番出来なれと思ふ様な人を非常ニ大事ニせられた」(二七六頁)。そしてこのことは新島自身のイタリアのトレ・ペリチュにおける英文の手記の内容と一致する。「教壇に立つ機会が再び来るなら、私は教室でいちばんできの悪い学生に特別の注意を払うつもりだ。そうすれば教師として成功することはうけあいであ

る」(『新島全集』一〇巻二八五頁)。

多くの学生は新島の涙に非常な感動を受けた。松尾首次郎は言う。「新島先生はいつも朝の会には出席せられた。……そして其の話が又涙と共にせらるると言ふのだから、非常ニ感じたものであつた」(二二六頁)。吉田清太郎はこう述べている。「或る時先生は、一國の救はれるのは一人二人の力では行かない。幾多の義人が血を流さなければ駄目である」と、涙の眼を上げて私を見られた事を覚えて居る」(二七七頁)。第二次外遊に先立ち新島が明治十七年四月三日に第二教会で行った告別演説のようを、村井知至は次のように伝えている。「初めは日本語で演つて居られたが、遂ニ中途から英語ニなつて終ふたが、其の主意は、若し私が船中で病氣が重くなつて斃れる事があるならば、必ず、神よ御心のままになさせ給へ、吾が心のままをなさんとするに非ず、と言ふ祈を以て祈禱せられたと言ふ事であつた。これには満堂が泣いてしまつた」(二九一頁)。

山崎為徳と市原盛宏は初期の教師として双壁であつたようだが、森田久万人にはずい分からい点がつけられている。「授業法が下手

であるのみならず、頭脳が透明でないらしく、説明の曖昧なのは常に我等に満腹の不満足を与へた」(二三頁)と岸本能武太は回想する。森田排斥の運動がおこり、とうとう彼は学校をやめることになって送別会が開かれた。ところがその夏休みのうちに山崎為徳が急逝したため、森田は同志社にとどまることになったという。

初期の学生たちの宣教師に対する態度もこれにおとらず活発である。学生たちはすぐれた先生を尊敬し、だめな先生を軽蔑した。いちばん尊敬されたのはあきらかにラーネッド博士である。規則正しい、冷静な学者のおもかげが浮かんできく。デイヴィス博士には賛否相なかばする評価がある。綱島佳吉には「生ける基督ニ遇ふの感」(二一九頁)がしたが、新原俊秀は「デビス氏の神学の授業が鈍ろ臭くて嫌やだった」(七四頁)と言う。ゴードン博士は評判が悪く、グリーン博士はもっと悪い。もっとも評判の悪かったのは女学校にいた一女子宣教師である。その人は「病身の為もあったでせうが誠に嫌な思出を残した人で、今日同窓会等に於ても口を揃へて氏の非を挙げる程で、一人として良い人であったと

言ふ者はありません。……教育されたと言ふよりも、寧ろ悪感化を受けたばかりであります」(三九〇頁)というのである。これは麻生ゑいの言葉だが、その冒頭には若干名前の混乱が見られ、私にはこの宣教師がミス・フランシス・フーパー、すなわちデイヴィス宣教師の後妻となった人であるように思われてならない。麻生はさらに「私共在校時代ハ西洋人の全盛時代であつて、何事も宣教師の意の儘にて、其専横ハ日本人を使役したと言つてもよい位であります」(同頁)とさえ主張する。

材料提供者たちは口を揃えて土曜日の山登り、遠足の思い出を語る。兎狩や猪狩も彼らの青春の血をたぎらせた。上賀茂の運動会における旗奪いはふんどし姿で両軍が激突した。休暇中に出掛けた伝道旅行のことものなつかしく語られている。

初期の同志社でひととき光る奇人は池袋清風であるが、のちに安中教会の牧師となる柏木義円もまた奇人の一人に数えられている。柏木は年中着物を着換えず、どんなに垢がついても洗濯せず、ほこるびでも繕わず、何日間も入浴しない人だった。その柏木を「発

見」して同志社に送るようにしたのは、どうやら上州まで伝道の手伝いに行った蔵原惟郭であつたかと思われる。蔵原は名を伏せているが、精神が蘇った人物というのは柏木以外には考えられないからである(一一七頁)。

山本覚馬の娘久栄のこともこの本に数回でてくる。『黒い眼と茶色の目』はすでに大正三年に出版されていて、同志社卒業生の間にセンセーションをまきおこしていたといわれる。にもかかわらず、この想い出の提供者たちは久栄と蘆花に対して冷静であり、現在の写真週刊誌的な覗き見の傾向は全く感じられない。大正前期の道徳的健全さは見事というほかないのである。

紙数の都合でこれ以上は書けないが、この外にも本書は興味深い材料を豊かに提供する。便利な索引もついている。ただし資料として利用する場合には、神話と歴史的事実を識別する、注意深い眼が必要であらう。初期の同志社史の研究に新しい刺激を与えてくれる出版として、この書物を歓迎したい。

(大学文学部教授)

取扱い・同志社収益事業課(電〇七五・二五一・三〇三七七八)

函館脱出直前の新島襄写真

桑 嶋 洋 一

(一) はじめに

昭和六十年八月十三日夜、函館で「初代ロシア領事を語る会」が開かれた。幕末の開港間もない箱（函）館に滞在したイオシフ・アントビチ・ゴスケウイチ（文政一年―明治四年）の邦訳伝記が鈴川正久氏、尼崎市によって出版され、さらにモスクワ在住の著者ビタリー・ゲザーノフ氏を開んでの会合であった。会する者百人あまり、「白ロシアのオデッセイ」の表題の伝記を手に、知られざるゴスケウイチの人柄やエピソードがつぎつぎと披露された。

函館は、安政二年アメリカ・ロシアなどに対し狭義の開港がなされ、同六年五月から商

業港として欧米諸国に門戸を開いた。日本の鎖国政策にペリオドが打たれたのである。

ゴスケウイチは、初代駐日ロシア領事として安政五年九月、軍艦「ジキット号」で館員や家族・医師などを伴って着任した。在住中は樺太問題などで幕府と交渉するなど外交官としても活躍したが、病院を開設して市民を治療したり、写真術を函館の人に伝え、日本人を留学生としてロシアへ送るなど文化方面でも貢献した。

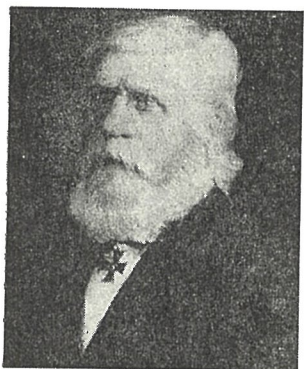
函館での会が開かれる一ヶ月ほど前、筆者は北海道写真史料の調査のため大阪・京都などをまわった。この時の主目的は、同志社創立者新島襄が元治元年六月十四日（旧暦）

函館から密出国する直前、ロシア人に撮ってもらった肖像写真と、撮影状況をしたためた民治に送った書簡に接するためであった。

写真は湿板写真術によるもので、日本では別名「ガラス写真」「生どり」などと呼ばれている。縦六・五、横五・二釐の大きさで、ケースに納められた写真のまわりは真鍮板で装飾してあった。仕上りは悪く、乳剂調製か露出・現像の過程で失敗したため、町人姿の新島の半身像の輪かくがやや判別出来る程度である。また、この半身像写真のほかに「箱館脱出時の新島襄」という全身像の複写写真が市立函館図書館にあり、長い間これが函館で撮影されたものと言われていた。この写真は、新島がアメリカ・アマースト大学で同級生の注文で、脱走姿にふん装し明治三年撮っ



函館脱出直前の新島襄肖像（ゴスケウイチ撮影）同志社所蔵



「油彩」ゴスケウィッチ肖像(ピタリー・グザーノフ画) 市立函館博物館所蔵

もののだが、この原画が同志社に所蔵されていると渋谷四郎編著「北海道写真史・幕末・明治」(平凡社・昭和五十八年刊)に書いている。河野仁昭同志社史料室室長は、「何処から出た情報かわからないが、私たちの手許にはない」とのことであった。

半身像写真はカラーで複製させてもらい、グザーノフ氏会合で公開し、函館の人が写真術を習得するスタートとなった記念碑的な資料だと解説した。グザーノフ氏も目を皿のように大きくし息をはずませていて、これはのち思いがけない展開をした。

(一) 誤っていた函館写真史

北海道に写真が渡来したのは嘉永七年、ア正五年から定説となった昭和十年までの経過や、木津と同じころから写真術習得を志していた横山松三郎(天保九年―明治十七年)、田本研造(天保三年―大正元年)の事歴を木津と並べ考察したところ、木津開業「元治元年説」は誤説と判明した。

函館写真の事始め史は、函館区史(河野常吉編著、明治四十四年)に初見された、同書は、木津はゴスケウィッチに写真を習ったと誓きながら、横山松三郎が下岡蓮枝の門下生となり、得た知識を木津と田本に伝え二人は

メリカとロシア人が開港のため函館に來たときだが、技術の伝習は商業開港以後のことでロシア人によって伝えられた。函館市内に建つ「北海道写真発祥之地」碑の碑文によると木津幸吉(天保一年―明治二十八年)がロシア領事から写真術を習い、元治元年北海道初の写真館を函館に開いたと刻んでいる。一方脱出直前の新島書簡に「私罷在候魯館に於て、写真会有之候処私師匠ニコライ私に勧め……」とあり、写真会とは同好者と写真研究会が開かれた意に感ぜられ、木津の開業年と重なっている。

協同研究し、慶応二年ごろより人の依頼に応じて撮影するに至ったとしている。一方、木津元治元年開業説は元函館図書館長岡田健蔵氏によって大正五年発表されたが、翌年慶応説に変わり、昭和六年まで慶応説であった。ところが、河野は大正七年刊の「北海道史」の付録として「北海道史人名字彙」を編纂、末刊だったが木津の項は岡田の初説をそのまま引用した。この字彙は、昭和七年ごろ函館図書館が写本し、岡田の目にとまり昭和十年岡田による「函館市功労者小伝」に採用され、定説となり碑に刻まれることになった。

ゴスケウィッチがジキット号で函館に着任したとき、医師アルブレヒトが同行して來たが彼は文久三年五月帰国した。後任がゼレンスキー(谷沢尚一、幕末箱館ロシア病院に關連する史料・はこでて第二号・昭和六十年)で、田本に写真術を教えた人物。田本は長崎で医学を学び、安政末年來函しロシア病院に勤めた。三十五歳のとき脱そになり片足を切断、医師になることをあきらめ写真に転向した。誕生年から計算し数え年を加えると慶応二年、満年齢で同三年となる。河野は区史編纂のとき田本から直接取材しており、区史の

「写真事歴」の記事は正確である。

横山は、函館で最初に写真の有益さに気付いた人物である。彼は幼少の頃より絵を描くことが好きだったが、文久元年ロシア軍艦で来港した画報通信社画工「レーマン」の助手となった。「画工・レーマンナル者上陸シテ風景勝地ヲ写セリ。然ルニ多クハ山間ニ踏ミ入り、原野ニ宿ス。備フテ器具ヲ荷ハレムニ多クハ其勞ニ堪フル能ハス、因テ之ヲ伝教師仁古雷氏ニ謀ル」（松三郎伝記、明治十七年）仁古雷はロシア領事館敷地内にあったギリシア正教会の牧師として文久元年六月軍艦「アムール」で来函した。新島に肖像写真を撮るようすすめたニコライである。松三郎はニコライのすすめでレーマンの助手となり、写実的な洋画の世界を知った。

だが、レーマンは洋画法を教えず松三郎は独学で苦心する。「覆載之間品物ノ森然タル箇々筆端ニ尽ス能ハス」そこで先づ対象物を写真に撮り、写真画から臨写することを思いついた。彼はベリール来港のとき写真を知り「目鏡を以て地形を写し、人に対して其真像を写し実に妙点なり」と述べている。

松三郎が洋画法の独学に三年の歳月をかけ

写真利用法を思いついた文久三年十月、箱館奉行は香港方面へ出貿易を計画、健順丸の派遣を決定した。が途中で計画変更船は元治元年二月二十一日（旧暦）上海へ到着した。これより先、松三郎はこの船に乗り上海で写真術を習得しようと、つてを求めて上海へ行ったが計画は果されず空しく帰国した。当時の上海には職業写真館がすでに二館あり、フランスで写真が公表された翌年にその技術が渡来したという写真では先進都市（常住俠・日本照相本与中国・国際撮影・昭和六十年、今井宏氏訳による）であった。

ガッカリ帰函した松三郎の耳に届いたのがゴスケウイチの存在。彼はロシア軍艦からカメラを入手し、余暇にそれを楽しんでいたという。「今見るに筆とらず其真景を写す事神速なり。何卒して此術をもつて母の真貌を写し後世に残し永く孝行をいたしきと思ひしより。しきりに起心し居内魯国のコンシユールゴスケベツと申す異人此術を知り機械を所持し楽しみに肖像写す。此時愚弟十四歳なり。住吉屋庄兵衛と申商人あり。此店に愚弟松蔵を見習に遣しおけり。其店に魯人買物に來れり。愚弟をしてよく語を教えよく買物を



函館の人に初めて写真術を伝えたゆかりの地「函館ハリストス教会」（左建物）

明治25年撮影 市立函館図書館蔵

扱いさせりと言つ。松蔵に申事を愚弟に尋ねて写真の事を聞く。愚弟魯人に尋ねて、魯人尋ねる人を連れてこいと言ふ由。夫故魯館に行し所至て見馴れざる図画写真等も沢山あり。心安くなり写真事を相尋申といへども其語よく不分。只手続、此時知りたり、元治元年の冬なり」(松三郎自筆の履歴・横山裕氏蔵)

冬というから十一月十二月の頃であらう。

松三郎が初めて写真を知った瞬間であるが、過去の伝記には、上海へ行く前すでにゴスケウィッチより写真を習得していたと書かれていた。この頃の魯人の写真技術はまだ不十分、新島の写真や同時期にとられたと思われる林儀助親子の写真(函館図書館蔵)など、



林儀助親子の写真(函館図書館蔵)

ともに画像の仕上りは悪い。松三郎が下岡連枕の門人になるのは、完璧な技術習得であり、慶応元年(一説には二年)のことである。松三郎遺品の木津肖像の説明に、松三郎自筆で「門人」と記してあることもあり、木津の開業は元治元年でない一つの証とならう。時の経過とともに木津の写真伝習の年月が、開業年になってしまったのではあるまいか。

(三) おわりに

昨年夏、函館の会合が機縁となり「ゴシケビッチを偲ぶ旅」がもたれ、彼の生地ミンスクやお墓にお参りして来た。モスクワからはグザノフ氏も同行し楽しい旅となった。ミンスクの国立ベロルシア地誌博物館には、ゴスケウィッチのコーナーが設けられ、筆者が函館で新島写真を開陳説明している写真も展示され吃驚したが、新島写真は、北海道ヘロシア人によつて写真技術が導入されたことを証明する日ソ両写真文化史上貴重な「宝物」だと確信している。

(北海道新聞記者・写真史研究家)

同志社談叢

第7号

論 文

新島襄の「私学」思想……………沖田行司

富士成豊と新島襄……………関 秀志

―富士の新島宛書簡を中心として―

スカッダー家の人びと……………本井康博

―L・L・ジェーンズと熊本バンドをめぐって―

水沢における山崎為徳資料……………高橋光夫

―水沢教会収蔵資料を中心に―

雲峰論補遺……………河野仁昭

同志社の近代建築(補遺)……………前 久夫

―遺稿と資料―

資 料

聖霊降臨記実 後編

同志社理事会議事録

大正八年十一月〜同十一年八月

一九八七年二月発行 頒価一〇〇〇円

取扱い 同志社収益事業課

(電話〇七五―二五一―三〇三七〜八)

沖繩の空

薬師川 虹 一

今年もまた沖繩にやってきた。空は海の青を映し、海は空の広さを映して、明るく広い。賑かな那覇の街に入ってホテルの小部屋から見おろす市街は立派なビルが立ち並び、

ここが戦史に残る大激戦場であったことを思い出させるものはない。それどころか、ここが海に浮ぶ縄の切れ端のような島であることさへ実感として理解することができないほど、島自体が広々としている、といつも思う。

古来、日本と中国大陆との中間にあり、交易の中継点であったと言へば聞こえはいいが、両勢力の断えざる圧迫をはねつける武力もなく、又、武力を用いる荒ぶる心も持たな

かったこの国の人々の歴史は、太平洋戦争で手荒い結着をつけられたのかもしれない。

今年のクラスは昨年の倍に賑らんで一五〇名を数え、教室も階段式の講堂が当てられていた。素朴で心やさしい青年達は今年も私を気持ちよく迎えてくれる。一、二部共通の集中講義なので、夜の三講時を通しての授業が十二月と二月に分けて五日ずつ続くのだが、田辺校地と今出川校地の間を振子のように往き交いながら、会議、会議に明け暮れた今年の私には、授業が楽しくてならない。負けおしみて言っているのではなく、しみじみとした気持ちで我に返ることができるようで、ホテルの狭く殺風景な部屋もさして気にならな

いから不思議である。

日曜日、琉球大学のS氏が昼食に誘って下さった。S氏の車で首里の街を抜けてゆく時龍潭池を右に見て走る。近くこの池を浚渫する計画なのだが、戦争中の不発弾が何発か確認されているらしい。それより、戦争中、この池は沢山の死者を飲み込んでいたので大変だ、と言う話を聞いて何か冷たいものが背中を通ったような気がした。昼食を済ましてからドライブを兼ねてホテルまで送って貰って休んでいると間もなくS氏から再び電話があり、見知らぬ人達のクリスマス・パーティに突然誘はれて出席することになった。招いて下さるのはメリーランド大学沖繩分校で音楽を教えておられるパンガニーバン教授とのこと。フィリピン系のアメリカ人で、可成りなピアノストだとは運転しながらのS氏の紹介である。自宅へ百人以上を招き、手製の料理でもてなして下さるとは、一体、どんな大邸宅かと思うが、六時から九時頃まで、適当な時に来て、適当に帰ってゆくので、常時いるのは四・五十人だろう、ということである。

正月とクリスマスを控えて、日曜日の夕方

はすごい車の氾濫で、物に動じぬS氏もさすがに少々いららされてゐるのがわかる程である。夜、テレビが、その混み具合の凄さを報じていたから車の溢れている沖縄でも珍しい混雑ぶりであつたらしい。

パンガニーバン教授のお宅は嘉手納の住宅地にある。庭をたつぷりととつた住宅街はアメリカ社会というか、異国の雰囲気を感じている。

少し探してたどりついたパンガニーバン氏のお宅は楽しくパーティが始まつていた。日本人は私達の外には見当らないようだった。

若い総領事のリチャードソン氏は外交官らしく、流暢な日本語をあやつる紳士である。八十五歳になるといふ、ジャネット・フィンクさんは戦前、北京のアメリカン・スクールで校長先生をなさつていた方で、何と、パール・バック女史とはとても親しく、いろいろの想い出話を聞かせたいようであつたが、少々その場合は賑かすぎて、想い出話を聞くには不似合つた。雑談でお茶をにぎし、近くの女性に声をかけると「今晩は」と美しい日本語が同時に返つてきて、思はず双方で大笑いになり楽しい話が弾んだ。三歳になる

男の子のやんちゃな話してから、私の孫が這い廻つたり、立ち上つたりで目の離せない話になり、彼女の息子が相手を見て、自然に相手国語を喋ることから、私の孫が日・独・ハーフで、日・独・英語で育つてゐることを言うのと、彼女も、日・独・ハーフなのだと言つて、又、ひとしきり話が楽しくなつた所へ彼女の旦那が来た。潮どきと思つて次の相手に移ることにした。

パンガニーバン先生はフィリピン系の方なのからかもしれないが、ビールはフィリピンのビールが出ていた。クセのない、飲み易いビールでついグラスを重ねた。サービスをしてくれている日本人の青年が、皆さん饗のまま飲まれます。その方が気楽ですよ、と言つてくれたので、見廻すと、なる程ビールの人には小壘をナプキンで拭いてゐる。大きな七面鳥の丸焼が部屋の中央で異彩を放つてゐる。デザートは、仲々美味に焼かれたフルーツ・ケーキと直經三十糎以上もありそんなカスタード・プディングにフルーツのクリームがえ。お腹のふくれた頃に音楽教授の伴奏で女性のプロ（ウ）歌手がクリスマスの歌などを歌い、最後は教授のピアノ独奏が数曲続く。ポ

ピュラーからクラシックまで、楽しいピアノであつた。

辞したのは九時近い頃であつた。帰途、車中で、フィリピンの人は話し好きで陽気な方たちだと聞いているが、本当に楽しい先生です、とS氏に話しかけると、氏はいつになく厳しい表情を走らせて一瞬沈黙された。おや、と思ふ間もなく静かに話して下さつたことは楽しい気分です、私にとって極めて冷酷なものだ。あの一瞬の沈黙は、それを口にするこの重大さを考えられてのことであることは言うまでもない。

戦後四十年以上の時間が流れ、戦争が歴史の中の文字の世界となつて、国際化とか国際交流とかを平和な顔で唱えている時勢ではあるが、否応なく国際都市になつてゐる那覇で、今もなお、フィリピンの人達の日本人に対する憎しみは決して消えてはいないのである。彼らは沖縄に占領軍として上陸してきた時、日本人を皆殺しにする覚悟で来たのだと、識り合つたフィリピン人は悲しい顔で言つてゐた。その憎しみは韓国人の人たちのそれに劣らぬものですよ。その友人が話してくれた日本軍の行為は、勿論、極めて一

部の人の行為ではあったろうが、体験した人達にとって、それは常に全体の問題なのである。聞いている私にも、話しているS氏にも、それは骨の凍るようなことがらであった。いや私以上にS氏の心は複雑に震へていたであろう。国際都市那覇は、日本人が国際社会に出る時一度は通過しておかねばならない内部の聖域のように思えるのである。特に東洋の国々から青年達を迎える時、彼らの誕生以前のことからか、教える方も戦争を知らない人が大多数になっているとか、事実、若い人々の間にはもう完全な新しい風が流れているではないか、というような、「時間」に「デウス・エクス・マキナ」の役を期待するだけでよいのかどうか、国際化が楽しく語られる今日この頃、私は凍りつくような時間が今もなお、この暖かい南の島には静かに流れていることを感じて、思はず襟もとに手をやったのである。

一夜明けた南の国ではクリスマスというのに明るい陽光が降り注いで昨夜の一刻が爐のように思えてくる。戦争体験をいつまでも引きずって歩くのは私共の世代だけでもう沢山だ。夜の世界を生きてきた者だけが昼間にも

夜を見ているのだ。夜を知らない世代が過半数を占めるようになった今、もっと明るく、世界に出てゆくべきなのだ、いつまでも夜の想いに執着してはいけけないのだ、と青空は語り、私の胸に残る夜の部分を押しやろうとする。確かにそうかもしれない。人類の歴史はいたる所に暗黒の闇を抱えている。しかし、そのことと、夜の部分を消し去ることとは全く違うのだ。昼は夜の彼方に来る、そして昼の彼方に夜が来ないと言えよう。夜に囚はれるのが間違いだるように、昼を信ずるのも間違いなのだ。大切なことは夜の闇の深さを知り、昼の明るさの広さをも同時に知ることだろう。開かれた心、自由な心というものは、夜にも昼にも偏執しない心のことである。日本の歴史と文化にも、他国の歴史と文化にも偏執しないことである。イギリスの詩人ジョン・キーツは「私達の心を天下の公道にしよう」と言った。国際化とは、国際××論を学ぶことを意味するだけではなく、自分の心を開いて天下の公道にすることなのである。

同志社は昔から何かりベラルな、開かれた学園という雰囲気は漂はせてきているのだ

が、果して今の同志社が、といはないまでも、少なくとも同志社大学が、学生の心を開かれた姿にするような教育をしているのかどうか、いささかの危惧を感じない訳にはいかないようである。アーモスト・サマー・プログラムに参加した学生達が、アーモスト大学の教室であんなに伸び伸びと心を開いて討論し、自説を主張していたのに、帰国の機中で、「さあ、又鎧を着なければ」と言はせるものが、同志社大学にあることをまず第一に考えねばならないと思うのである。教室の中で鎧を脱げるようにすること、それが国際化の第一歩ではなからうか。これが全ての根本であり、従って最大の難事なのだ。何故ならそれは我々日本人の生きざまの根底に触れることになるからであらう。道は一つしかない、例え短かくとも、海外に出ることである。恥の文化を克服することである。沖縄の空は青い。

(大学文学部教授)

松茸狩余話

小原弘之

一九七四年の秋、米国シアトルを最初に訪れた時、当時仏教会の会長だった藤井義人さんがアメリカマツタケの発生地を案内してくれた。藤井さんの秘密の場所はレニア山という三千メートル級の富士山に似た美しい山の麓にあった。日系移民として米国に渡った一世の一人だが、初期の移民は農業とか土木工事の作業夫として働く人が多く、生活も苦しく、且つ人種差別に悩まされたそうだ。そんな時、香り豊かなマツタケを誰かが見つけたのだろう。この大柄で白っぽいマツタケは、最初は食べるどころか気味が悪かっただろうと思う。しかし勇氣（？）ある誰かが食べて安心ということになり、マツタケ狩が一世

の間で定着していったのだろう。よくよく考えてみると、キノコを最初に食べた人間は、牡蠣を最初に食べた人間と同様、まことに勇氣ある人（あるいは向う見ず（？））だと思う。異様な形と色は食欲をそそるどころか、魔物が潜んでいて、近くにいただけで魔法にかかってしまいそうな気がしても不思議ではない。事実、魔法のキノコというのが存在しており、例えば、テングタケとかシバフタケの仲間には、幻覚を起こさせる物質があり、これを食べると錯乱状態になることがある。メキシコの一地方では、巫女がこれを食べて陶酔状態となり、占いや予言をするそうだ。さて、一旦マツタケ狩が定着すると、日本

人の間ではブームが来るのも当然。競って山歩きが盛んになってゆく。藤井さんは、富士山に似たレニア山とマツタケ狩がどれほど自分達の日本への郷愁を慰めてくれたか判からないと話していた。

二回目のアメリカ行きで、薬剤士をしていた日系二世の徳田ジョージさんと知り合った。彼は松茸狩の天才で、十数ヶ所に及ぶ自分のツボを持っていた。普通は、マツタケのツボは親子の間でも秘密にするものだが、私にはすべて案内してくれた。ピュージエト湾に浮ぶオーカス島に出かけた時などは、私と十五分間別行動している間に、百本近くのマツタケを袋一杯採って来たのには全く驚かされた。それでも彼は不服そうで、十年位前には、つまづいて転倒したところ、マツタケの絨毯（？）上を十メートルほど滑べたそうである。徳田さんは、私にとって、マツタケ研究の良き協力者だったが、昨年の春急逝された。アメリカにはもう一人（？）マツタケ狩の名人がいる。それは鹿である。この動物は好んでマツタケを食べる。他のキノコは見向きもしない。しかも、「開き」という最高の状態のキノコだけを、それも柔らかな傘の

部分だけを食べて軸を残こしている。

しかし、近年、このアメリカのマツタケ山に害獣が出没し山を荒している。その動物の名はエコノミックアニマルという。現金をちらつかせるものだから、普段はキノコに興味を示さない連中が大挙して山に入り込んでゐる。本当のキノコハンターはルールを心得ているから山を荒らしたり乱獲することはないが、金に目が眩んだ連中はそんなことお構いなしである。他国の自然を荒してまで日本の秋の味覚を求めなくてもよさそうなものと怒りよりむしろ悲しさを感じたものだ。三回目の訪米の際、保護動物である鹿の「えさ」を確保するという理由で採集を規制しては如何かと提案したことがあった。五年前の話である。その時は笑い話に終わったが、昨年一年間滞在している間に州の資源局の友人が立案して大規模採集に対して一定の納付金を課すことになった。これは一種の目的税のよくなもので、資源保護などの基礎研究に一部還元されることになるらしい。結構な話である。

さて話を日本の松茸狩に移そう。松茸狩は万葉の昔から人々に楽しまれて来た。拾遺和

歌集にも茸狩の歌があり、後に蕪村はマツタケを「拾遺の茸」と俳句に詠んでいる。マツタケ狩といえば、大蔵流狂言に「独り松茸」という番外篇がある。松茸がよく獲れるというので、ある人が松茸狩に出かけようと友人を誘ったが、その友人は『もう行って来た』と断る。仕方なく自分一人で行ったが、どんな所に松茸が生えているのか解らない。松茸という以上、松の木に生えているものと思ひ、木の上ばかりを見ているうちに、根っ子に躓いて転んでしまう。驚いたことに、目と鼻の先にマツタケが生えていた。彼は転べばマツタケが見つかると思ひ、それ以後這って歩くという話である。この中で松茸を焼いて食べる下りもあるが、面白いのは、出かける前に誘った友人が、一人でこっそり茸狩りに来ているのに出会すところである。どうもマツタケ狩の秘訣は古今東西を問わず「人を欺く」ことにあるらしい。この風習は今も残っている。

太閤秀吉も松茸狩が大好きだったようだ。「翁草」にその記事がある。急に稲荷山へ松茸狩に行くといひだした。家来は大慌てで、山を調べたが、すでに人々が採った後だっ

た。そこで別の山から松茸を仕入れて植えて置く。俗にいう「植え松茸」である。秀吉がこの松茸を始うれしそうに採っているのを見て役人連中はほっと胸を撫でおろした。しかし、御帰城という頃になって、ふと一人の女中が口をすべらせて「何事にも御抜りのない明智の君にあらせても、これ丈は御存知遊ばさぬと見える」と笑った。これを聞いて他の女中が、そと太閤に申上げると、太閤はそしらぬ顔で「何で知らぬことがあろう。がよろしいよろしいだまれだまれ」と軽くしりぞけた。百姓の子秀吉ならではの心遣いである。

このように古来、貴賤上下を問わず人々に愛されて来た松茸狩の風景を古今の名句で綴ってみるのも一興であらう。

台風一過秋晴れの爽やかなある日である。

人多き松茸山の日和かな（杵栗）

人々は一斉に山の中に入ってゆく。くもの果が顔にかかることもしばしば。

茸狩やしばらく探る松林（格堂）

松茸や一つ見つけて闇の星（素堂）

正にその通り。松茸は通常はフェアリー・リング（妖精の輪）あるいは茸輪をつくって拡

がる性質があるから一ヶ見つければ、必ず周辺にある筈である。

松茸や知らぬ木の葉のへばりつく(芭蕉)ちよっと土から顔を出した松茸、笠の上に落葉、それも広葉の葉をくつつけている。妙に新鮮にひびく。

君見よや拾遺の茸の露五本(蕪村)ぼつ／＼収獲はじまる。しかし、

松茸や人とらるる鼻の先(去来)という事態もしばし起る。まさに先んぜしを憎むや茸狩(碧梧桐)

である。茸狩は意外と女性が上手である

茸狩の女に勝をとられけり(一茶)茸狩もいよ／＼佳境に入る。

我声の風になりけり木の子狩(子規)全く夢中である。だが必しも常に採れるとは限らない。

梢から猿が教える茸かな(一茶)

というようなこともあるかも知れない。ただあまり夢中になり過ぎて、

松茸をさがして坊や又さがし(無堂)になり兼ねない。収獲を持ち寄って宴会が始まることもある。

山でのむ酒は別なり木の子狩(枝鳳)

そして秋は終ってゆく。

秋もはや松茸飯の名残かな(子規)ただ松茸狩はいつも／＼確実にうまく行くとは限らない。

茸狩のから手で戻る騒ぎかな(一茶)あまりにも日本的な風景ではないか。

さて、このあまりにも日本的なマツタケも「後天的松茸不作症候群」(?!)のため、昨今は庶民の口に入らない。万葉の昔から愛されて来たマツタケを次の時代に継承するのは現代を生きる我々の義務であると考えている。それも、試験管の中の遺伝子資源としてではなく、美しい松山と一緒に後世に伝える必要がある。マツタケ山を大切にすることは、資源の保護だけでなく自然保護の原点でもあるからである。そこでもう一つ狂言を紹介したい。

「菌(くさびら)」という狂言のキノコが面白い。ある男が庭に季節はずれのキノコが生えて来て気味が悪いので、山伏を呼んで祈禱をしてもらうことにする。しかし、祈れば祈る程、逆に茸がむくむくと出て来る。山伏は『身共の行力が達した故に、地の底にある分が皆出る。今出たは松茸椎茸ちゃ。最早余り

多うはあるまい。さりながら、有る分は皆折り出さねばならぬ」と祈り続ける。しかし、きのこは出続ける。『これは姫茸、いくち、しめぢぢゃ』と増えるばかり。でも山伏は負けていない。『物が無くなる時にはこんな風に増えるものだ』から心配は要らぬと自信満々。だが少し不安になったのか、ここまできたら『なすびの印』という秘法を使うと言って印を結びながら、『いろはにほへと』と祈るならば、などかちりぬるをわかなれ』と祈る。しかし、キノコは増えるばかり、どうにも動きがとれず、山伏は逃げて行くというところで話は終る。

最後に冗談を一つ許して頂く。この加持祈禱を京都のマツ林、それも昔の産地、例えば稲荷山で試みてみたい。秀吉の頃を偲びながら、山頂に立って、『なすびの印』を結んで、『いろはにほへと……』と祈れば、半開きのマツタケに追いかけられるというのは、夢としても甚だ痛快ではなからうか。

(女子大学教授)

桜の容姿接しがたし

李 汝 松

この見出しを見て、日本人はたぶん不思議と思うだろう。桜は日本のどこにもあり、ごくありふれた花ではないかと。しかし、外国人のわたしにとっては、桜はたしか上品で華美な貴夫人のように、なかなか近づけない珍しい花である。

わたしは二回日本へ行ったが、二回とも桜の咲く頃日本に招かれた。しかしながら、一回目は訪問の時期変わり、二回目は天気が暖かくて桜は早く咲いたから、とうとう満開の桜を見ることはできなかった。

桜は日本の代表的な花（国花とも言われている）であり、富士山と並んで日本のシンボルと誇りでもあることは、ずっと前から知っ

ていたが、一九八〇年第一回目の訪日までは、一度もその美しい姿に接する機会に恵まれなかった。南京に行ったとき、玄武湖を中心にした造られた玄武湖公園には、桜洲というところがあって、そこには桜の木が沢山植えられている、と人から聞いてすぐとんでいったが、花の咲く季節ではないから、桜かどうか知るすべもなかった。十年まえ、西安は日本の京都と奈良という二つの古い都と姉妹都市としての関係を樹立してから、京都から桜の木が贈られて、西安で一番大きくて美しい公園——興慶公園に植えられたことを新聞で読んで、またとんでいったが、とても小さい木で、花はついていなかった。

一九八〇年の春、わたしは西北大学第一回目の訪日団の一員として日本を訪問した。行くまえに、今度こそ桜を見ることができると心の中で思ってた。大変嬉しかった。しかし、訪問時期は一カ月近く延ばされて、がっかりした。それでも、日本の土を踏んでから、あつちこつちをまわっている中に、桜をさがした。二条城を見学したとき、案内している村尾先生が、「この木はみんな桜ですよ」と親切に教えてくださった。わたしは嬉しさのあまりその木を一本一本調べたが、どの木にも花はなかった。それでもわたしはあきらめずにさがしつづけた。やっとのことで、灰色になった花びらを一つさがしあてた。残念ながら、みっともない姿をしていた。

二年後の一九八二年、わたしは同志社大学から客員教授として招かれて、もう一度日本を訪問した。満開の桜を見るために、まえもって日本へ行くつもりだったが、西北大学第二回訪日団も同志社大学に行くから、外事弁公室主任の甘先生から、先に行かれては、代表団の方は言葉も通じないから、きつといろいろ不便なところがあるでしょう。一緒に行きませんかとすすめられた。同志社大学の

招請の手紙には桜の咲く頃日本を訪問するようにとちゃんと書いてあるから、一緒に行っても間に合うだろうと思って代表团と一緒に行くことにした。ところが、その春は大変暖かくて、桜は一週間ぐらい早く咲いた。わたしたちが日本についたときは、桜はすでに散り始めていた。大阪の伊丹空港まで出迎えに来てくださった上野総長夫人からそのことを知ると、またがっかりした。来年に見ようと言って自分をなぐさめた。今度の滞在は一年だから、どうにか一番美しいときの桜を見ることができるとかたく信じていた。

時のたつのは矢の如し。一年の滞在はあっという間にすぎた。帰国は四月六日にきまつた。不幸なことには、その年の春は寒く桜はなかなか咲かない。桜は南から咲きはじめるのと、どこかで読んだことがある。それで帰国のまえに四国へ旅行に行った。高松市の栗林公園で咲いた桜が見つかって長くそこに立って眺めていた。桜は一本だけで張合がなかった。

京都を真二つにした鴨川の両側には、桜の老樹があった。学校へ行くとき、よくそこを通った。旅行からかえると、また、そのあた

りへ行つて見たが、星のように密集している蕾だけで、花は一つもなかった。

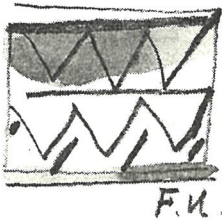
帰国のまえに、どうしても桜を見たいから、京都では、どこの桜が早く咲くか、と事務の落合さんと田中さんに聞くと、円山公園の桜は早く咲くと答えたので、同志社大学に留学している于さんと周さんを誘って行ってみた。たしかに咲いていた。しかし、ほんの少ししか咲いてなかった。歌で歌っているような、見わたすかぎり霞か雲かの風景ではなかった。満開までまだ何日かかるだろう。航空券はもう手に入れたし、一年の滞在も終わったから、やたらに延期するわけには行かない。わたしたちは円山公園をあっちこちまわった。桜の写真を沢山撮った。枝垂桜は開いた傘のようで、花は殆んど咲いていた。そんなにきれいではないが、その細くて長い枝はまるですんなりした美少女のように手をさしのべて、はにかみながら観光客を迎えているその姿は実にきれいで、わたしに深い印象をあたえてくれた。

帰国してから、わたしはがっかりした気持ちを日本友人の藤本先生に書いたら、桜の写真を沢山送ってくれた。美しいが、本物で

はないから、やはりいくぶんもの足りなかった。わたしは目をつむって想像するたびに、いつも霞か雲のように空をすっかりおおってしまふ満開した桜が目のまえにあらわれてくる。本当に言いようもないほど美しいと思っただ。しかし、百聞は一見に如かず、わたしはぜひ一度この目で桜の雲を見たいものだ。

(元中国西北大学助教・同志社大学客員教授、現在、中国西安工業学院助教)

(本文は筆者が日本語で書いたものである。)



早稲田から愛をこめて

秦 恒 平

同志社と早稲田とでラグビーの試合などさ

れると、ほんとに困る。私たち夫婦は同志社の美学を出てきたが、息子は中学このかた早稲田の学生であり娘の婿殿も早稲田の教師である。そればかりか私まで、息子が法科へ入学の春から文科に講座をもっている。ま、早稲田の応援に傾いてしまう。この春は、同志社に勝った早稲田が大東文化大学に負けてしまった。あまり佳い正月とはいえなかった。

早稲田の文学部には、ちょっとめずらしい文芸専修科がある。もっぱら「書き手」を養成しようというワケで、卒業論文ならぬ卒業制作で小説や詩や評論や戯曲を書かせる。十数年の歴史があり、活躍している人も何人か

あるらしい。知らない。

私は頼まれてそこで「小説」のゼミを二年間だけ引受けた。二年だけですよと念を押して引受けた。数えてみると六十人くらいが週一度の私の講座に登録しているが、三分の二程度は出席する。べつに小説論をするでもない。文学を、講義もしない。徹底的に枚数と期日を限って書かせる。枚数に応じ期日も守れるというのが、まずはプロの前提になる。そのかわり書かれて来た作品はつとめていいねいに教室で批評し指導し、書き直しもさせる。実践一筋、作家として生き抜くための一切を手渡して行くという方法であり、器用に巧いことなど、私の教室では通らない。

本気で作家を育てている気かと聞かれれば、首を横に振る。とてものこと作家になど簡単になれるものでないことを教えている。むしろ一人でも文学の佳い「読者」として、卒業後も我々を応援し支持してもらおう魂胆である。

四、五枚で書かせた最初の作品はサンタンたるものであった。書こうとするモノやコトと枚数とがつろくしない。しかし、それが利いた。二十四、五枚になるとかなり頑張った仕事も提出された。四、五十枚になって苦労の甲斐ありという作品も出てきた。但し、なかには自分の作品の出来がよく納得できていない連中もいた。ホーッと思ふのが、いっそ、そういう中に混っていたりした。

この一年、都合長い短いあわせて百数十本の学生の小説を読んでみて、五本ほどはそれでも心に残る作品に出会うことが出来た。心に残らなくても、現代学生風俗なり気質なりはぜひぶん汲み取れて面白かった。同じ大学に通う学生の親としては、はなはだ参考になった。しかも次年度は、どういふ風の吹きまわしか、ことし付合った三年生のうち十人の卒業制作指導まで頼まれている。毒喰わば皿

までか。だが骨も折れる。

私自身が小説を書きたいと思ったのは、猿飛佐助や岩見重太郎を読んでいた昔になる。武者修行のはなしくらい書いてやらあとき書き初めて、すぐ投げ出した。これは手強い。そう思って息を詰め、以来およそ二十年ちかくも手を出さなかった。とうに同志社も出て、京都から東京へ、生活も環境も変っていた。それでも勤めはじめて三年というもの、書きたいのを辛抱し、二十六歳の七月三十日から突如書き出したのである。

以来七年のうちに私家版で四冊の作品集を作った。四冊めの表題作「清経入水」が幸運に恵まれて雑誌「展望」で、第五回の太宰治賞を受けた。昭和四十四年、桜桃忌の日だった。賞の存在も知らず、「展望」という雑誌があることすら実は知らなかった。むろん応募などという真似もしたことがなかった。受賞に至ったのは、誰かしらの好意が幾重にも働いていたのだろう、それも正確には分らずじまいである。

二足のわらじを五年履いていた。昭和四十九年には会社勤めの方をやめた。同志社法科出の福本武久君が同じ太宰治賞を受けたの

は、その少しあとだったろうか。

数えてみるとほぼ年に四冊平均くらい、もう七十冊ばかりいろんな本を次々に出して来た。純文学のこととて、小説ばかりですんなり暮すというわけに行かない。古典、歴史、芸能、美術、現代文学、言語そして京都をめぐり議論など、評論やエッセイの本もたくさん書いた。小説は、ほとんどを京都ないし周辺に取材して来た。

宣伝している気では、ない。私の仕事は宣伝とは、あまり縁がない。

これまでは専ら出版社から本を出して来た。今は作品を書き、自分で本にし、自分の読者に直接届けるといった方法も、ほぼ採算に乗って併用出来ている。その方法で徐々に読者が増えて行けば、それで今の私はいいのである。その方がいいのである。幸い、読者は全国的に徐々に確実に増え続けている。

発足間もない私家版『秦恒平・湖（うみ）の本』のシリーズは、昨年の桜桃忌このかたも三冊を順調に出版して、軌道にきっちり乗っている。久しく絶版や品切れだった作品が、次々に作者自身の手で「本」になって行く。

本はたくさん出る。しかしすぐ姿を消してしまう。読みたい作品が、本がないために読めない。そんな読者の嘆きを自作に限ってなり解消すべく、私は、作者の手から読者へ直かに作品を、簡素な「本」にし、一冊一三〇〇円均一で直送している。遠くなり過ぎた作者と読者との距離を限りなく回復しようという、現代の作家として、この事業はぜひ為さねばならぬ一つの「批評」なのである。

私の同志社時代に、身のまわりで小説を書いてたらしい学生は何人もほの見えていた。しかし読ませろよといっても、めったなことでも読ませてくれなかった。人に読まれて恥ずかしいくらいな小説なら書くな……と、私は腹を立てた。腹を立てたばかりに、書きたい小説をいざ自分で書き出すまで、ずいぶん長く辛抱をした。同志社はダメだなと思った。

同志社はダメだなという実感に、根拠はない。しかし実感に相違はない。いわばへんにイジけていてグズなのである。東京で作家生活が続けているうち、いつかそれが、京都はダメだなという実感にまで深まって行った。京都がチマチマと小さくなって行くのだ。

ごく最近、京都のある企業から、顕彰事業

への協力とその選者に就任してくれないかという打診があった。ま、それはいい。しかし発想においてあまりに地方区的に過ぎ、対象とする資格者は京都在住の人に限りますなどという。聞けば京都で出す賞を、京都と無関係な人にやるてはない……といった感覚で立案されていた。ダメだなと思った。

そういえば噂にも聞いたが、いつか京都のある別の企業が音楽の賞をあの小沢征爾氏に授与したところ、世界の小沢知らんが京都のためには何をしてくれると、授賞にケチを付ける人もあったとか。何ということをして、「京都」が「世界」の小沢に賞を与えたことを、なぜ胸を張って慶びそして誇りに思えないのか。

かりに今度の場合でも、そもそも日本中に、京都と無関係な日本人など一人もいないとは、なぜ大きく考えられないのか。激しくいえば外国に住む外国人に賞を上げてもいいのだ、賞を出すのが「京都」なればこそ、いいのだ。世界ではあまり広すぎるにせよ、せめて全国的に大きな器量を見せて欲しいではないか。そういう都市で久しく京都はあつたし、今もそうあつて少しもおかしくはない

はず。その点、企業内容については知らないが京セラの京都賞など、ともあれ、ワルくないと思う。

例のその顕彰事業は、私の苦言を容れるか容れないか、今後どう具体化するかわからない。しかし出来れば、いままら京の美術工芸奨励賞などと在来の上上にまた屋を重ねたりせず、むしろ、古典文学をかつては満開させた古都京都の地に、現代の息吹ゆたかに、新たな文学や思想の芽を育む趣旨の顕彰事業を大いに起して貰いたいものだ。それも京都に限るなどとケチなことはいわず、そして大家といわず新人ともいわず、年度内に発表された作品や論文中で歴史に残るほどの傑作には、少なくとも一千万円以上の賞金を与えて欲しい。該当作品がなければ次年度に積み増してもいいだろう、とにかく厳選であつてこそよく、したがって大切なうえにも大切なのは選考委員の任命になる。ここに運命を賭するほどの神経を使って、人格、能力ともに卓越したいわばアンタッチャブルを充てたい。

なぜか京都には、近代以降、文学の種が根づかない。その意味ではそうした顕彰事業に帯同して、すくなくも隔月刊程度で、「京都」

ならではという品位に富んですっきりと充実した「文学・思想」誌が発足し、着実な努力で内容を確立できないものだろうかと思う。そしてこの場合も、第一流の佳い編集長を宛てるのが、何よりぜひ必要であらう。

同志社人のなかで、かつて雑誌をやるとうと東京の私に誘いをかけて来た人は一人や二人ではなかった。だが、プランをこっから問い詰めてみれば、いい年齢をした人たちがお話にならない寝言のようなことを言って、熱ばかり上げていた。版型も建頁も予想部数も、したがって頒売価格も、要する原稿の分量も筆者の人数も、製作費や原稿料も、そもそもどんな読者を対象にいつから準備していつ創刊し、一年に何冊出すのかもまったく考えていない有様だった。そもそも、どんな内容にしたいのかも。呆れて、手を引くしかなかった。ダメだなと、またまた思った。しっかり、し……。京都にも同志社にもそう言いたい。

(昭和三十三年大学文学部卒業・作家)

図書館で出会った人々

加藤 参郎

「奇縁」という言葉がある。手許にある辞書でみると「ふしぎな縁」と説明している。

二十七年余にわたる名古屋での図書館員生活において数えきれないほどの奇縁があった。そしてまたこれから先の生活においても多くの奇縁に遭遇することであろう。

年の暮れもおしせまった昨年の十二月、一つの奇縁に会った。この日、私は目の不自由な女子短大生と電話で応待していた。勤め先の瑞穂図書館のボランティアグループの方に「対面朗読」をしていただきたいということであった。あいにく担当者が不在のため、代って私が手配することにした。年末の多忙な時期であったが、幸いボランティアの方が

快く引き受けてくださり、依頼者のHさんが持参された資料の対面朗読が行われた。

専用の対面朗読室は、当館に設けてあり、昭和五十四年三月以降、ボランティアグループの会員により、多くの盲人の方々に朗読奉仕を行ってきたが、Hさんは初めての人であった。朗読終了後、担当されたボランティアのSさんにお礼をのべ、三人で雑談をしていたところ、Hさんは現在京都精華大学短期大学部専攻科に在籍され、田口瑛子先生のもとで図書館学を学んでいるとのこと。田口さんは同志社大学の卒業生、図書館学を専攻されており、最近の情報（『図書館雑誌』昭和六十二年一月号）によるとアメリカ留学中

の活躍がアメリカ図書館協会（ALA）の機関誌『American Libraries』一九八六年十月号に「日本のフェミニスト 女性図書館員の地位向上についてALAの活動を研究」と題してALA図書館人材局長マーガレット・マイヤーズ女史により紹介されている国際的な研究者の一人である。田口さんとは面識があり、昨年秋十一月十四日、本学の青木次彦・渡辺信一両教授の格別の尽力により開催された図書館学特別講演会と田辺キャンパス図書館見学に参加し、田辺校地からの帰途親しく歓談する機会をもったばかりであった。

この特別講演会もわが同志社にきわめて由縁のあるもので「同志社が生んだ図書館人である湯浅半月」の業績を中心に「湯浅分類表から記述独立方式へ——京都府立図書館と私——」と題し、広島文教女子大学教授藤田善一氏が感銘深い講演をされたのである。湯浅半月氏は私にとっても生涯忘れることが出来ない人の一人である。同じく同志社出身でわが国でも代表的な図書館学者である竹林熊彦先生の講義で識り、強い衝撃を受けたのであった。

かくしてHさんを通じ、田口さんの盲人学

生に対する深い愛情と献身ぶりも知ったのである。Hさんは名古屋の出身で小学校三年生の時失明されたという。一本の白杖をたよりに明るく歩く彼女を介添えしながら市バス停まで見送った。彼女と歩きながら三十余年前の同志社での学生生活を思い出していた。当時盲人学生が何人か本学に存学していた。Hさんは淡淡と話してくれた。「京都は自由で、楽しい学生生活をおくっています。」と――。

これより先、十一月五日には当館のボランティアグループの研修会をかねて、名古屋ライトハウス図書館長岩山光男氏に「障害者の生活と現状について」と題して講演をお願いした。岩山氏ご自身目が不自由であるが、昭和三十三年三月に当地の南山大学を卒業されている。ちょうどこの時、私も本学を卒業したが、岩山氏と私の学生時代とが完全に重なりたく感動し、講演がすみ挨拶に立った私は言葉につまるほどであった。帰りのタクシーの中で岩山氏は「本当は同志社に行きたかったですよ。」ともらされた時は、非常におどろいたのである。

このようなことを書いてくると「図書館はそういうことまで――」と思われる方も多い

かもしれない。ちなみに名古屋市中では鶴舞中央図書館に盲人のために点字文庫が昭和四年九月に開設されている。当時（市立名古屋図書館と称した）の阪谷俊作館長は、「本館は市立の公共図書館たる性質上市民全体にわたって各方面の利用に応ずるが為に常に苦心して居ります。」盲人の方々のために「点字図書」を備付けて其研究と慰安の為に施設す可き事は申す迄も無く創立の当初より常に考え来った処であります。」と同館館報第六十九号（昭和四年九月）紙上において述べている。

かくして同館の点字文庫は全国的にも知られ、昭和三十一年四月には厚生省から点字図書館に指定され、さらに昭和五十九年四月には鶴舞中央図書館の新装開館にともない点字図書閲覧室、対面朗読室、録音室、書庫等が新設され、一段とその機能が整備されたのである。

瑞穂図書館のボランティアグループは、盲人に対する対面朗読のほか、視覚障害児のために「さわる絵本」「指で読む本」ともいわれる）の制作（昭和五十三年一月より実施）、影絵の上演（昭和五十九年より実施）、電話による新刊案内（052-853・11

99・昭和五十四年より実施）のテープ吹き込み等も行い、多くの市民から好評を博している。

本市の図書館では読書会活動もさかんに行われている。多くは図書館のさまざまな催しの中から生まれ、今も活躍している読書会が約四十グループ程ある。これまで私が結成に参画したものに「ちくさ文学研究会」（千種図書館）「わかくさ会」（熱田図書館）「若竹会」（同）がある。ちくさ文学研究会は、本学とも縁の深い梅花女子大学教授八木毅先生が当地の愛知県立大学に在職中のとき先生とともに作ったものでかれこれ十七年にもなる。わかくさ会は、「子どもの本を読む母親の会」に参加された方達を中心になり結成したもので、会名は私の発案で『万葉集』にある「藤波の思ひ纏はりわかくさの思ひつきにし君が目に恋ひや明かさむ」の妻にかかる枕詞「わかくさの」から名付けたもので十五年にわたるユニークな活動の歴史をもっている。若竹会もわかくさ会同様、館の催しをもとに生れたもので、わかくさ会にあやかり一つ一つの節目を大切にしたいという願いを込めて若竹会としたものであった。わかくさ会・若竹会

は、ともに毎年の読書週間にちなんで開催されている「本に親しむみんなのつどい」の大会資料においてもその活動内容が報告されている。とりわけ、わかき会の会員による七〇字前後にまとめられる読書感想文は、注目に価する。また、若竹会の京都への旅も会員の思い出に残る楽しいものであった。

私は、昭和六十年四月から現職についているが、当館には「葦の会」という読書会があり、昭和四十四年十一月に発足し、毎年会誌『葦』を発行し続けている。私も寄稿を求められ、第15号（昭和六十年八月）には同郷で国際的にも著名な彫刻家舟越保武先生との感動的な出会いを語り、第16号（昭和六十一年九月）には「身のまわりでおこったことなど——私の鎮魂記——」を寄せ、私の人生に大きな影響を与えてくださった三先生——酒詰伸男博士（本学元教授・考古学）・竹田聰洲博士（同・民俗学）そして前出の竹林熊彦先生（同元講師・図書館学）との出会いを紹介した。発行部数は非常に少ないミニ会誌ではあるが、毎号会員たちによる珠玉の名文でうめられている。

さらに「年輪読書会」（昭和四十八年六月

発足）という六十歳以上の方々による読書会もあり、毎月一回当館集會室で楽しい例会が開かれているが、時には講話を依頼されたりする。これらのほかに市民の自主的グループによる学習活動もさかに行われている。その一つの夕路婦人会短歌グループの合同歌集『夕路』も毎年ここから生れている。

この中（第二十七集）の一首に伊良湖岬で詠んだ歌「奢りなき差羽の渡り身の力抑へ抑へて蒼天に高し」（渡瀬登喜子さん）がある。伊良湖は思い出の地である。民俗学者柳田国男先生が学生時代（明治三十年の夏）にこの地に逗留され、この時の思い出を島崎藤村に語り、かの有名な「椰子の実」が生れたことはよく知られている。作曲は本学出身の大中原三氏で奇しくも私が生れた年に作られている。かつて私は近畿民俗学会の機関誌『近畿民俗』（31号・昭和三十七年十二月）に「伊良湖の漁夫歌人磯丸のことなど——『遊海島記』によせて——」を寄稿したことがある。忘れかけていたこの拙文が昨年刊行された『柳田国男研究資料集成』（第七巻）の巻頭に収録されているのである。その上出版広告には多くの著名人とともになぜか愚名が出てい

る。この巻の執筆者は他に多数おられるが、坪田譲治・住谷一彦・山川菊栄・中村哲の諸氏とともに紹介されているのだからまさに「青天の霹靂」と言わざるをえない。

昭和五十三年の夏、この地に投宿して愛知図書館協会の事業の一つであった『愛知県郷土資料分類表——利用の手引——』（同年十一月刊）の編集作業を行ったことがある。是非一度訪ねたいところであったが、こうして長年の念願がなかったのである。さらに本書の序文は、昨年十一月七日他界された本学出身の加藤龍太郎先生（名古屋大学名誉教授・元愛知県立大学長、当時愛知図書館協会会長）が寄せておられる。

これもまたまさしく「奇縁」という他はない。昨年の夏、新しい著作の準備のため来名され久しぶりにお会いした知己の早稲田大学出身の詩人Hさんがふっともらされた。「加藤さん、同志社に行かれて本当によかったですね——」と。いつまでも心に残るのうれしい言葉である。

（昭和三十三年文学部卒業・三十六年大学院文学研究科修了・名古屋市瑞穂図書館長・筆名）

田辺校地寸感

河村吉宏

無残だなーというのが、同志社田辺校地を初めて望見したときの印象である。緑が削りとられ白い地肌をさらしている広大な丘陵。大規模開発の現場でいつも覚える異和感が、そのときも私を襲った。昭和五十九年九月、京都新聞洛南支局勤務を命じられ、田辺町内を車で一巡してみた日の感想だ。

数日後、造成工事さなかの田辺校地を改めて訪れた。校地内を歩いてみたいという私の求めに、現場事務所の職員が「無理ですよ、ちょっと広すぎる」と笑い、ジープで一緒に回ってくれたのだが、七十六・四畝という土地の大きさをまざまざと実感させられた。南面に広々と開けた丘陵に、明るい陽がふりそ

そいでいる。削り残された北側の山からファインダーをのぞいたが、広角レンズをもってしても校地の全域をカメラはとらえようもなかった。

こんなに広々としたキャンパスで学生生活を送れる若者たちへの羨望の思いと、大学にこれだけのスペースがほんとうに必要なのだろうかといふかる思いとが、私のうちで交錯した。明徳館の大教室と地下食堂、それに新町校舎だけで四年間を過ごしたといってもいい自分の同志社生活を思いおこすと、この広いスペースを濃密な時間で埋めることはほとんど不可能に思われて、白々と広がる校地をぼんやりながめながら、私はある種の虚脱感

に見舞われるのを感じていた。

◇

洛南支局に勤務した一年間に、同志社田辺校地からむ原稿をすいぶん書いている。玉露と一休寺で知られるだけの、人口五万人に満たない田辺町にとって、同志社の進出はかつてない大事業である。農村からの脱皮をめざす町当局は、町のイメージアップに資する同志社の進出に好意的だった。『文教都市田辺』というアピールは、関西学研都市構想とも結びあつて、住民の心を揺さぶるかにみえたのだが……。

しかし、取材活動を通じて私の感じさせられたのは、むしろ同志社に対する住民の冷やかな対応と、どこことなく割りきれない感情だった。同志社は校地造成に先立って、関係住民との折衝を重ね、各自治会とは環境整備等について約束した覚書を交わしている。河川の改修や道路の改良なども実際に進んでいる。それでも、住民が同志社を歓迎しているようには、私には見えなかった。

その原因のひとつは、農業を主に暮らしてきた共同体住民の、よそ者に対する反発心によるものだろう。大学というものにイメージ

される“都会ふうの”“若者ふうの”“インテリふうの”風俗に対する反感。そして、いまひとつの原因は、住民の反発反感を裏返しにしたもの、つまり同志社側の、地元や地元住民に対する無関心さである。

キャンパスを完成させるために地元の協力を求め、その見返りとして応分の財政負担を引き受けて環境整備につとめる——というのはどんなディベロッパーでも果たさねばならぬ責任だ。同志社も事実、その責任を負うていたけれど、このギブアンドテークを超えて、田辺町という共同体のありように積極的に参画していこうという意思は、ほとんど感じられなかった。住民の良き隣人たろうとし、彼らの仲間入りをするのだという姿勢は、少なくとも開校前の同志社人にはなかったと言いきいても間違いではないだろう。

田辺町役場には、朝日、毎日、読売、サンケイ、京都の五紙で構成する記者クラブがある。地域に一定の影響をもつ洛南タイムスも準加盟している。このクラブの記者が書く原稿は、主として山城版と称される地域面に掲載され、地域住民にとって最も読まれる記事なのだが、このクラブに対し、同志社は私

の知る限り一度として接触を持とうとしなかった。町役場にはしばしば足を運んでいた同志社理事長室のメンバーも、自らクラブに顔みせた人はいない。

造成や建設工事に伴う道路の混雑、通学路用地買収問題、近鉄興戸駅の付け替え構想に伴う地元の説得、下宿生受け入れのための協力要請などなど、同志社が地域住民に語りかけ、協力を求めねばならぬ事柄は数多かったはずだ。だが、同志社は町当局や地元ボスとの交渉でよしとし、地元のマスコミはもとより、地域や住民の感情には関心を払わなかった。

六十年九月に田辺町で開かれた住民シンポジウムで、「不動産、建設関係業者だけが動き回り、住民サイドには知らされないことが多すぎる」といった批判発言が相次いでいる。また「同志社が来て喜ぶのは周辺に土地を持つている者だけ。一般住民は迷惑をこうむるだけだ」と吐きすてるようにいう人もいた。町議会の有力者が「学生から入町税をとれないか」と真面目に言いだすのも聞いた。

田辺校地について、こうした住民の感情があることを、同志社はよく認識しているべき

だと思う。

◇

六十一年三月七日、完成まじかな田辺キャンパスが報道陣に披露された。レンガ色の校舎が初春の陽光に輝き、まぶしい。私はすでに田辺を離れていたけれど、誘われて半年ぶりに訪れたキャンパスに目をみはった。まだ学生のいない校地をぶらぶら歩きながら、この明るいスペースに、しかし私は、どこことなく気恥ずかしい思いもした。鬱屈こそ青春だと頑固に思いこんでいる身には、このキャンパスはなんとなく場違いなものに思えてくる。

大キャンパスというものが、そもそも好きでないのだ。大学には講義を受ける教室があればいい。レストラン風の食堂や、公園めいたスペースは学外に求めればいい。学生生活がこんな快適なキャンパス内でまっとうされるのが、私はいやなのである。屈託のない青春ドラマの舞台のようなキャンパスで、若者が「青春しちゃって」ことがないように、後輩諸氏には望みたい。

◇

同志社の魅力はなにか。ひとくちでは言い

ようがないが、キャンパスが京都市にあることも大きい要因だ。全国から学生が集まるのは、京都という都市の魅力ともいえる。

大学は、まず一人の秀れた人格に傾倒し、学びたいと思う若者が集って始まった。ソクラテスをたずね、プラトンをたずね、そして我が新島襄を求めて……。それが大学を形づくり、ついで大学都市が形成される。京都市内には現在三十九の大学・短大があり、学生数は十二万三千人という。彼らは確かに、それぞれのキャンパスに通い、そこで講義を聴き、実験をしている。だが、十二万もの人間が集まってくるのは、キャンパスだけでなく京都の町そのものが若者にとって貴重な教場であること、都市そのものもまた、ひとつの大学であることを察知してのことにほかならない。

私たちは、生協ではなく町の古本屋で書物を探したし、居酒屋で友情をあたためた。町を歩くことで歴史を学んだ。映画館の暗闇で人生について教えられた。美術館や博物館でデートした。質屋に時計をあずけてラーメンを食べた。雀荘や喫茶店など、いまでも教室よりもずっと懐かしい。若者は、町で学ぶの

である。

田辺町には、そんな町がない。いかに広くても、恣意的に切りとられ造成されたキャンパスだけでは、若者は育たない。学研都市構想も全国で相次ぐキャンパスの郊外への再開発も、大学のバックグラウンドとしての都市の役割を敢て無視しているように思われてならない。工場や遊園地と大学は違うのである。仄聞するところでは、同志社大への入学志願者がわずかながら減少しているとか。

しかし、サイは投げられた。田辺校地に同志社百年の大計がかかっているのなら、課題は田辺町を魅力ある大学都市に育てていくことだ。だが、京都のような町は、一朝一夕に出来るものではない。とすれば、新しい大学都市のありようを模索しなければならぬ。

まず欲しいのは、田辺校地と地域住民との一体感、仲間意識である。同志社が田辺キャンパスのみを大切とする閉鎖的な考えに陥らず、徹底してキャンパスを開放してほしい。自慢の食堂で、野良着姿のおじさんおばさんと学生と一緒に食事するのが珍しい光景でなくなるほどに。キャンパスを孫を連れたおばあちゃんの遊び場に、図書館もホールも地元

の住民が入れる場所に。

そして、同志社の教職員のほとんどが田辺町に住みついてはどうだろう。キャンパス内で、町の飲み屋で、いきいきとした知的なサークルが会話をはずませているように。学生が夜、教師の自宅を訪れて談論できるよう。町の青年たちも加わって夜を徹しての酒盛りになればそれも楽しい。秀れた人格あるところに人は集まり、人は集まることで学びあうのだから……。

けれど、そんなことは白日夢だ。田辺キャンパスは夜ともなれば人っ子ひとりいない空漠としたスペース。学生たちは二年間ここに通い、地域の人々と心ふれあうこともないだろう。たまに住民向けの公開講座が催され、十数人の老人が聴講にキャンパスを訪れるだけ。

田辺校地について考えるとき、私はほとんど途方にくれてしまう。マスとしての学生に対応する場としてでなく、新しい大学都市への壮大な実験の場となることを念じているのだが。

（昭和三十九年大学文学部卒業・京都新聞社宮津市局長）